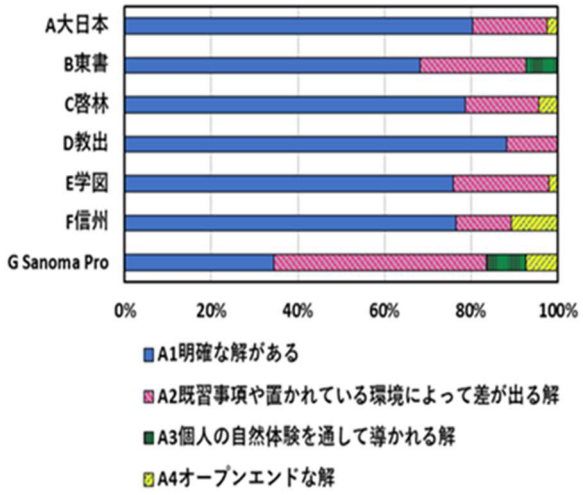
神宮前だより

正解のない問いを探究する大切さ

校長　手代木　英明

学習到達度調査（PISA）や国際数学・理科教育動向調査（TIMSS）で、上位に入る日本とフィンランドの理科の教科書の生物分野の比較をした結果、大きな違いがありました。

日本の教科書は、解が明確な問題を調べるのに対し、フィンランドは「正解のない難しいことについても探究する問題」が多くありました。



私たちの研究は、教科書の本文から「問い」を抽出し、①「問い方」の十三分類と②「解の内容」による四分類を行いました。

結果は、日本の教科書の問い方は「どのように」が一番多く、「どんな」「どこに」「ですか？」なのに対し、フィンランドは、「何？」「なぜ」「どちら」が多く「はい・いいえ」と単純に答えられる問題はありませんでした。

解の分類では、グラフのように日本の教科書の問いは明確な解があるものが八割を占めるのに対し、フィンランドは、四割もありませんでした。

日本は、系統的な知識の習得を大切にしていますが、海外では、証拠を基に自分の考えをもって、議論することをしています。このように学んだ子たちが大人になって議論したとき、日本人がエビデンスに基づくアーギュメント（事実と理由付けを提示しながら、自らの主張を相手に伝える。）ができるのかが心配になります。

本校では、三年前から表現力の育成に力を入れ、ＩＣＴを活用した学びを推進してきました。来年度は、シブヤ未来科や理科・社会科等で「探究やＳＴＥＡＭ教育」を更に充実させていきます。

この論文は、校長と北海道大学教授鈴木誠、神戸大学助教Erkki T. Lassilaの共同研究です。一般社団法人 日本生物教育学会「生物教育」六十四巻一号に掲載されます。

髙木　菜那さん特別授業

二月十五日（水）に本校ＰＴＡと学校運営協議会のご協力で、「夢の授業」が行われました。

「やりたいから、やるんだよ」「悩んだら挑戦してみる」など、熱いメッセージをたくさんいただきました。保護者に対しても「レールを敷くのではなくガードレールのように見守ってください。」と子育ての参考になるアドバイスがありました。

金メダルを見せてくださいました。

3月の生活指導

「学校生活のまとめをしよう」

昨年度に引き続き、コロナ対策を徹底しての学校生活が区切りを迎えようとしています。少しずつ変わる様式の中で、子供たちは、自分だけでなく周りの人のことも考え、学校生活を充実させようと努力する姿がありました。我慢をしなければいけないことはたくさんありましたが、そんな中でも子供たちは、互いを思いやり、行動することの大切さを学ぶことができたように思います。

三月は、年度末を迎えるにあたり、自分の成長を自覚し、次年度への意欲につなげられるよう、振り返りを行います。今年度、繰り返し指導してきたことの中に「あいさつをすること」「きまりを守ること」があります。互いに気持ちよく学校生活を送るための基本的なことです。今年一年で、どれだけできるようになったのか、次年度はさらにどのような自分になりたいのかをしっかりと考えられるようにしていきます。また、気持ちよく新年度が迎えられるように、次の人のことを考えて、身の周りの掃除や整理・整頓を行い、環境整備にも取り組みます。

一年間、子供たちが元気に過ごせましたことに関し、保護者の皆様には生活指導面においても多大なご協力をいただきました。ありがとうございました。

（生活指導部）